

二十三年八月十九日、内地帰還のためナホトカ港出發、二十三年八月二十二日舞鶴上陸。即日、召集解除となった。帰還船は山澄丸であった。

シベリア抑留体験記

滋賀県 杉本 武男

私は終戦の年、昭和二十年より二十三年八月までシベリア（ライチハ）地区の炭坑にて酷寒飢餓労働に耐え、九死に一生を得て復員した者です。

満州にて終戦を迎えたのが昭和二十年八月末のこと。ソ連軍に武装解除をされ、ソ連軍の支配下に属し、昼はバレイシヨの収穫、そして夜は強行軍ということで、黒龍江を渡り、ソ連領に入る。

ライチハ収容所に到着するのにかかりの日数がかかった。我々捕虜が約八千人収容されたと聞いたが、酷寒の一冬で約半数の四千人となった。これも毎日々々炭坑に出る労働で体力も弱り、栄養失調となり亡くなったので

ある。

朝、炭坑に出て体が悪いので「班長の許可」を得て仕事を休んでいる我々戦友が、作業を終えて帰るときにはすでに死んでいるみじめさであった。また幕舎暮らしの小隊の中でも一晩に十一人死んだ。さすが小隊長の目に涙が光っていた。今もこれだけは忘れられない。

自分もいつか死ぬか、不安な日々を送った。このようにして死者が多く出ると、死屍当番に勤務しなければならぬ。今思い出すと昭和二十一年一月ころのことである。ソ連の埋葬地に戦友を埋葬したことである。トラックに石炭を積み込み埋葬地に出発する。ソ連の言葉が通じないが、通訳曰く、これから長さ二・五メートル、深さ二メートル、幅七〇センチを七個掘れとのこと、七人ほどの者が石炭をたきながら一日がかりでようやく掘り終わったのが夕方である。掘り上げた土砂が凍結してカチカチとなる。確か零下四十五度の寒さであった。

すると、ソ連の埋葬従事者がトラックに日本人四十九人の死体を積んでくる。何と一つの穴に七人ずつを埋葬したのである。何と残酷なことであろう。この世の地獄

である。埋葬を終わり、木の葉をかぶせて収容所に引き返した。このような体験は一生忘れられることはできない。

収容所に入った年の冬は、防寒被服も満足なものはなく、また靴のかわりに福助地下足袋を、また軍足もなく、毛布の端されを足の指に巻きつけて炭坑に通う。右足の親指は凍傷にかかった。今もその跡は残っている。

まだまだ気力はしっかりしているのだが体力の方が衰えて、これ以上の苦しさが続けば自分の死も目前に迫っていると、こんなことを考えているある日のこと、ソ連の某大官が収容所の視察に見える。これも日本の捕虜が大変に多く死ぬということで、我々捕虜の身体健康診断を命令したのである。

診断の結果、早速入院ということでザビターヤの病院に入院、一冬を越す。お蔭をもって一命を取りとめることができたのである。やがて春が近づいて退院をする。それからは道路工事、建築作業等の仕事に出る。ソ連の言葉も努力の結果少々覚えることもできて、ようやく収容所の毎日の日課に精を出すことができるようになって

た。我々には何といっても春の季節が最適である。

ソ連共産国の指導のもとに我々捕虜に共産主義の教育の徹底、それに反する者は「反動分子」ということである。毎日々々の作業の往復の道では「民主の旗、赤旗は」の労働歌の合唱であった。

シベリア大陸の夏は短く、九月末には雪が降ることである。やがてまた酷寒の冬を迎えてまた炭坑に、また春を迎えて三年有余。内地へ帰ったら何を食べよう、白いご飯を腹いっぱい、また甘いものと、食欲の話、このようなことで「東京タモイ」はいつのことやらと、大変に長い間の抑留生活であったが、幸いにして祖国へ帰る日が決まった。それが昭和二十三年八月中旬のことであった。

ナホトカ港に到着して二、三日はラポータ（仕事）である。とにかく引揚船に乗るまでは仕事である。さすが労働の国ソ連である。

やがて乗船することができた。そのとき何だかソ連との別れ、また一日も早く帰りたいと、いまさらのように思い浮かべる。夜になり舞鶴港の灯台の灯が波に浮いた

り沈んだりするのが見えて、朝の十時ころには到着のこと。このような思い出は一生忘れられることのできない大記録となることと思う。

抑留捕虜生活の実態

東京都 小沼文平

昭和二十年九月十日満州国北安収容所出発、ソ連領ブラゴエスチエンスクに上陸いたし、内地と違い早くも秋冷の気候となっておりました。上陸後は毎日ソ連の広大な原野にバレイシヨ畑が延々と続いている、そのバレイシヨの取り入れをしながら、くる日もくる日も続き、十一月ころまで続いたのであります。その間の食糧の支給は何一つなく、バレイシヨの取り入れ作業をしていたので、わからないようにちようだいして、飯ごうで炊き、食べて一日を過ごしながら、奥へ奥へと前進を続けたのであります。

そして十一月五日シベリヤ・テルマ収容所に、一個大

隊くらいの捕虜が入ったのです。山奥の廃坑ばかりあるところの収容所でした。翌日から廃坑のような何を見ても古々しい、入り口などは今にも落盤しないだらうかと思われするような炭坑の入り口でした。夜ともなると坑内には電気はなく、カンテラという携帯用の重油の入れであるランプが一個渡されます。入坑は前半後半に分かれ、前半は昼間、後半は夜間というように分かれて入坑です。入坑時は腰にカンテラを下げ入り口にある炭車を一人で押して、入坑です。炭車のみでもなかなか重く坑道を奥深く進むのですが、登り坂あり、下り坂あり、思うように進めず時間がかかり現場に着くのも容易なことではありません。現場に着くと、炭車に石炭を掘って満炭車になるまで、何時間でも掘り続けなくては坑から出ることはできません。一トン車一杯がノルマです。

食事の支給は、最初のころはパンに芋のスープでしたが、そのうちパンはなく塩湯の中にジャガイモの小さなのが二、三個くらい、あるときは馬の食糧である燕麦のスープ、またニシンの塩付けが一匹のときもありました。このような食糧が毎日続くので、やせ衰え仕事もな